

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: [shakaitsushin@nifty.com](mailto:shakaitsushin@nifty.com)

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇―〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

## 〈 も く じ 〉

### ■ 巻 頭 言 ■

安 倍 政 治 の 背 景

滝野 忠：2

参院選結果について

私たちの学習会 『国家論』に突入だ！

―森勉さんと中澤秀行さんの対話(二)― ……3

私 たち の 学 習 会 森 勉 ……3

―「国家」とはなにか―

「国家論」を勉強するために 中 澤 秀 行 ……7

資本主義社会における「政策」とは 山 下 俊 幸 ……9

オリエンピックと輸送網 ……11

読者からのおたより ……11

# 刊 旬 社 会 通 信

NO.1295

二〇一九年九月一日号

二〇一九年九月一日発行  
(毎月一日・一五日二回発行)

## 安倍政治の背景

## 参院選結果について

## 安倍首相

参院選は1人区の共闘が、安倍が企む「2020年改憲」阻止の条件と原則をつくった。安倍には知性のかげらの一つもない。新聞が伝える「首相の1日」は、安倍は自由な時間を側近、財界の大ボス達、メディアの大ボス子ボス達と飯を食いゴルフしながらの「耳学問」にあてられる。たまに「1日公邸」もあるが、読書、思考にあてたとの記事は見たことがない。彼の演説はじっくり考え話すのではなく、口が先に動く、口先男である。どこにでもいる一介の政治屋にすぎぬ。

共同通信社は8月19日、世論調査結果を伝えた。安倍政権の支持率は50・3%、支持しないのは34・6%とある。安倍が首相になってずっとそうだが、「なぜ安倍内閣を支持するのか」の解は抽象的かつ消極的、積極的・能動的に支持する者は「首相に指導力がある」8・6%、「適当な人がいない」43・7%に見られるとおり皆無にちかい。その一方、自民党支持率は40・9%、野党第1党の立憲民主10・0%等とくらべるとガリバー旅行記のガリバーとリリパットである。世論調査が伝える内閣+政党支持率の「高さ」、自・公同盟、選挙制度、さらに自民党が支配する業界団体、官僚機構、議員後援会を総動員する支持基盤の厚さ、政党助成金が、党組織すらもたない「立憲」野党を蹴散らかしているのである。

安倍は森友・加計にみられるが、論功行賞を徹底する。味方になれば出世させてやる。敵に回れば潰すゾとの恫喝だ。小選挙区制度は権力者に金、人事権を集中した。安倍への不満は前川前文科省事務次官の発言、行動にみられるようにふくらみつつある。現状では安倍が「やめる」というまで内閣は続く。執拗に憲法改悪を主張し続けるのは「じいさんの夢かなえるまではやめない」の表明であろう。

## 学者と文化人

参院結果を各誌・紙はどう伝えるかと、目をとおした。形而上学的かつスコラ的な議論ばかりだ。自・公が「勝った」、あるいは野党が「負けた」と。全体的かつ総体的に分析する論者・論評は皆無にちかい。「護憲リベラル」「民主リベラル」と言葉は「多様」な彼らの主張も「低投票率」「若者の無関心」、これでは学者として名が立たるととって付けたように「自由と民主主義を守る砦が脅かされ、その社会的基盤が崩れつつある」「自由と民主主義の砦を守り、その基盤を再構築するための道筋を、歴史から学ぶべき」と、神様でもあるまいに、天上高くから教訓をたれる。日本で「最高の文化人」とされる知性と知能がこの程度にすぎぬ。今や労働者階級と先輩が圧倒的(90%超)となった階級関係下、こんな学者・文化人にたよっていたら国民の意識は低くなる、低い意識が自民を勝たせてしまう。われわれが意識を高める学習、宣伝をやるしかない。

自民党政治への不平・不満・苦情・異存、そしていらだちは膨れ上がる。自民の支持率は落ちない、先の統一自治体選挙で議席をふやし、参院選でも「安定」的に議席をとった。自民を中心とする保守勢力がなぜ選挙で一定の勝ちを得つつづけているのか。

現在の階級関係を生産力と生産諸関係の矛盾の総和から、考え、分析しその原因を客観的かつ主体的な二つの面から考える。

### 客観的要因

まず客観的要因である。現代社会の基本矛盾である生産力と生産関係の矛盾は、「豊かな中の貧困」―格差拡大、揺りかごから墓場までの社会不安の全面的増大―としてある。具体的に見よう。

時代の流れははやい。技術革新、技術の進歩は「革命」的でもある。きのうの技術は今日、明日捨てられる。技術の変化―生産手段の体系の変化―は生産、労働、生活、文化の姿を変える。労働者が学び、訓練し修得した技術はすぐに古くなる。熟練労働は単純労働にとりかえられ、産業予備軍がふえる。産業予備軍の増大は労働者の競争を激しくする。生活様式も変化し、とどまることはない。資本のおかかえ学者は「200万円でも生活できる」と、労働者を貧乏に慣れさせる思想攻撃を展開する。団結がこわされ、抵抗が弱くなれば生活水準は下がる。賃金は1990年代から一貫して下がりつづけている。将来への全面的不安―出産、子育て、教育、労働、健康、老後―が全国民に重くのしかかる。

技術革新は労働者に失業への漫然とした、しかし、はつきりとした将来不安をもたらさずにはおかない。AI、IoTの普及と喧伝である。技術の進歩は生産力の向上としてあらわれる、一人の労働者がヨリ多くの生産物を生む。労働は軽減され、労働時間は短くてすむ条件をつくる。したがって、生産性向上は「いいことだ」と言う経済学者、文化人は多い。というより、ほとんどである。この考えは誤っている。資本主義社会での生産性向上―技術の進歩―は、資本の「貨殖」、剰余価値の拡大を目的とし、おこなわれる。労働者の生活水準、労働条件の向上を思っていない。

資本の儲け、利潤の根本である剰余価値は不払い労働がこれをつくる。だから、資本主義社会は搾取の強化となる。「窮乏」「抑圧」「隷従」「墮落」「搾取の度の増大」として現われる。全般的な「不安の増大」の根っ子である。

「窮乏」は飯が食えなくなることだけではない。つねに失業の不安にさらされ、いっつ飯が食えなくなるかわからない。メディアは報じなくなったが、「合理化」（技術革新）で失業者は増える傾向にある。したがって、失業への不安は大きく、強くなる。失業するということは家族が飯を食えなくなることである。不安は精神を萎縮させ、行動性、積極性を奪う。資本の奴隷となれば長時間労働と労働の強度、搾取の度の増大は、労働者の資本の抑圧の強化、隷従としてあらわれる。資本はこうして「自死」「精神的病氣」、墮落となって労働者を襲う。 (つづく 滝野 忠)

## 私たちの学習会 『国家論』に突入だ！

―森勉さんと中澤秀行さんの対話（二）―

### 私たちの学習会

私たちの学習会（国労上野支部反合理化研究会）は2001年10月、採用差別事件「4党合意」に反対するたたかいのなかで発足しました。これ以降、主なものとして、新春学習交流会（2003年1月から毎年1回）、国労3支部交流会（2009

年から春と秋に毎年2回)、月1回の定例学習会を2008年2月からおこなっています。

定例学習会のテキストについて主要なもののみを上げれば、『共産党宣言』(2008年2〜9月)に始まって、②『賃労働と資本』(2008年11月〜2009年7月)、③『賃金・価格および利潤』(2009年9月〜2010年3月)、④『空想から科学へ』(2010年5月〜2011年5月)、⑤『知っておきたいマルクス「資本論」』(神津朝夫著)(2011年6月〜2013年3月)―神津朝夫さんは向坂塾の優等生で学問の道に進んでいらっしやる、⑥向坂逸郎著『労働者の世界観』(2014年1月〜2015年12月)、⑦向坂逸郎著『資本論入門』(2016年6月〜2017年9月)、⑧小島恒久著『経済学入門』(2017年11月〜2019年5月)と続きました。

学習会のメンバーの結束を強め、仲間を増やす取組みに合宿があります。2009年から始まった合宿の場所は山好き・ソバ好きの「山男」が計画、立案しますから栃木、群馬、宮城、長野といった山国です。温泉・ソバ大好き人間ばかりですが、学習はそれ以上、欠かすことはありません。昼食は「いいソバ屋ないか」、宿着30分前後から学習開始、5時半頃まで。翌日は朝食後から12時頃までの強行な日程で楽しめます。

合宿での教材はレーニン「ストライキについて」、向坂逸郎「国労反合理化の闘いに寄す」、灰原茂雄『三池闘争と労災職業病闘争』、同『反合研運動について』、酒井一三(元国労書記長)『国労運動の歴史から学ぶ』、同『組合教育と労働者意識の確立』、中澤秀行氏を特別講師に招いての「向坂逸郎『資本論入門』について」(長野西条温泉)という具合です。(上野反合研資料をもとに滝野まとめ)

#### 討議資料

これらの活動を広め元気を出し合う「討議資料」も欠かせません。ほぼ毎月1回、次のような問題意識で努力し合っています。

- ①作っている自分としては、頭の整理になった。自分が勉強して仲間に広げるといふ気持ち
- ②職場の疑問、世の「常識」を問い直しながら、階級的視点(会社への批判)、労働者思想を職場に広げることを目的
- ③組合機関ニュースの補強をしながらも、労働者の気持ちから外れない、労働者のすぐ横にあるニュースをめざす
- ④職場の組合員はもちろん、主流派・革同役員、他労組であってもつきあいのある若い人にも配布

こんな活動が続けながらまとめと課題を次のように考え、前進、発展への努力を考え合わせていきます。

#### 学習1

「資本主義とは何か」(資本と労働者の関係)の学習が大事、「難しいことをやると参加者が減る」という意見も出たが、必要性を感じている人が根性をもって鬼になって進める。自分が勉強するとともに、仲間の理解度も高める工夫をする。ここで養っ

た視点が、会社施策への批判的な分析、折れない労働者根性を養うために役に立つ。「会社と向き合う」「職場・仕事の中心になる」「仕事総点検」「生産性向上」の欺瞞の暴露。

①自分としては、世の中のニュースを階級的視点で見られる、わかりやすく説明できるようになりたい。特に独占資本がぼろもうけして、労働者階級が窮乏化している事実、安倍政権が誰のために政治をしているかのわかりやすい暴露。

②一緒に学習してきた反合研の仲間が、「資本主義とは何か」と聞かれたときに、自分の言葉で話ができるようになってほしい。自分は何のために何をしようとしているのかの、自分の方針が持てるようになってほしい(上から目線で申しわけないが)。

③若い頃、「独習が大事」と言われ、われわれ世代はそういう努力をしてきたが、最近学習を始めた反合研の仲間は、独習しようにも良いテキストがない。だから、レポーターにあたりレジュメを作ってもレポーター自身から質問も出ないし、理解が深まらないような気がしている。レポーターにあたっていなくても、最低、あらかじめ一人で読んでわからない漢字くらいは調べてくるように話してはいるのだが…。

④学習会はもとより、例会さえも参加者が漸減傾向にあるが、若い組合員をどのように反合研に誘うかが課題。

⑤労働組合(機関)としての学習会をいかに作るのか、という問題。国労では新入組合員向けに弁護士を招いての労働法の入門くらいしか学習をしない。労働運動史も、社会の仕組みもやらない。だから「生産性向上では対立しない」となりつつある。上部機関がやらないのであれば、上野支部からでもやれるよう努力したい。

⑥役員たちが、「学習ばかりしている反合研」などと言って、「科学的社会主義の学習」を軽視する傾向が最近顕著になりつつあるが、ここをどう突破するかも課題。彼らが退場するまでの数年の問題と思うかもしれないが、その後の若い活動家を育てるためには、この傾向の克服は大事な課題。

### 行動(実践)――

①現状(職場の問題や自分たちの力)を具体的に把握するーやれることは何か

②頭を使って考え、機関や他人に頼らない自前の運動を作る(調査や点検も大事な運動の一步)

③そうは言っても、仲間や他党派、機関との関係は大切にし、大きな運動をめざす(駅頭宣伝や現場長交渉など)――配慮や根回し、仲間との妥協や自分の主張を広げることなどを学ぶ

④組合員が集まれる場を大切にし、広げる手段としての「討議資料」のような宣伝物を大切にする、一つ一つの会議・集会・学習会に人(仲間)を集める努力をする、会議等の中身を改善する

⑤例えば上野支部では、「下町反戦の会」など企業外の共闘も大事にしてきたが、平和と民主主義にまつわることも積極的に取り組む。地域・政治等への行動で、国労の「旗」をたてる

### 自分たちの運動を振り返る「総括」を大切にす

――お互いの励ましと、自己批判・相互批判

上野反合研の1年に一回の合宿では、灰原茂雄著「闘い学ぶ仲間たちと」の学習を行うことが多く、毎回できる限り支部役員を中心に「個人総括」を出し合ってきた。議論するなかで「問題意識」や「課題」をはっきりさせることが元気の源になると考える。

### 「国家」とはなにか

(森 勉)

さて、本誌前号の報告にありましたが、2回目の『経済学入門』を終え、次はなににしようか。そんな時、今の政治はヒドすぎる、独占資本は安倍政権と自民党を徹底的に利用する。安倍と自民党は「資本と労働の利害は同一だ、自由競争は一般に調和と国民福祉をもたらす」と説くが、事実―賃金は上がらない、産業予備軍は多くなり、賃金は下がる。その結果、結婚もできない、子どもの数は減るから、人口も減る。日本資本主義は下がる一方―によってますます化けの皮をはがされている。にもかかわらず沖繩では民意を無視し軍事化を強行する、一機何百億円もする武器を買いまくる、教育の反動化は強められ、国家の基幹統計は改ざん、加計・森友問題に示されるように、国家権力の安倍への集中はすすむ。いったい「国家とはなにか」の論議がまったくなくなった。

『宣言』に「ブルジョアジーは）大工業と世界市場とが建設されて以来、ブルジョア階級は近代的代議制国家において、ひとり占め政治支配を闘いとった。近代的国家権力は、単に、全ブルジョア階級の共通の事務をつかさどる委員会にすぎない」との国家についての規定がある。これを具体的に勉強したい、の声が高まりました。テキストは何にする、『国家と革命』、『家族・私有財産および国家の起源』と盛り上がりました。これを読みきることはたいへんです。なにか「手頃」な材料はないかと探しました、ありました。レーニンの『国家について』という講演録です。

森から学習会会員および中澤へ レーニンの「国家について」の学習会がいよいよ、6月14日(金)から開始です。

「国家について」は、勉強の仕方、本の読み方、自分の考えを持つということはどういうことか、から始まって、『国家』の階級性、唯物史観にたつた国家論がどういうものか、非常にわかりやすく―といっても勉強し、悪戦苦闘しなければなりません―書いてある本です。

『学習会』というものに、敷居の高さを感じている方、初めての参加に恐れをなしている方、絶対に大丈夫です。難しくありません。

最初の会は、『国家』『国』に対して、皆さんがどのように感じているか、考えているかについて、出し合うことから始めていきたいと思えます。すでにお送りしました「国家について」のファイルテキストの印刷と心の準備だけしてご参加下さい。

中澤から森へ 学習会ではレーニン全集29巻の「国家について」をやるのですね！別添(マルクス・エンゲルス・レーニンの「国家論」を勉強するために)は、参考になればと思って作成しましたので、よろしかったら利用して下さい。これは第一弾でして、続きが沢山あります。滝野さんからの依頼にも手をつけずに・・・、思いつくままに記しました。

そんな訳で、滝野さんには申し訳ないと思っただら、先程滝野さんから電話もらいまして、「国家について」の勉強会が始まったことも聞きました。そして、森さんに宛てた「搾取と収奪」についての手紙を、『通信』誌上に公開してはどうですか!?', とのこと。また、「森さんとの問答形式が良いのでは!?' とのことです。で、また相談させて下さいね。では。

(2019年6月15日)

中澤から森へ(別添)

マルクス・エンゲルス・レーニンの「国家論」を勉強するために

(1) 山島正男(「家族法のゼミ」の指導教授)先生に紹介された三冊の本

※山島正男先生は「家族法」の恩師でして、現行法の解釈をする前に家族の歴史を学ぶように!と指導されました。私有財産・国家の成立と歴史的発展を含みます。

①『家族・私有財産・国家の起源』(F. エンゲルス著・戸原四郎訳/岩波文庫)

※「それ(国家)は通例、もつとも有力な、経済的に支配する階級の国家である」(227頁)は、特に印象的でした。副題は「ルイス・H・モーガンの研究に関連して」ですが、マルクスの『古代社会』ノート(合同出版刊、及び『全集・補巻四』所収)にも驚きます。『起源』はマルクスの意思をエンゲルスが引き継いだ著作です。

②『古代社会』(モーガン著・青山道夫訳/岩波文庫 上・下)

③『婦人論』(ベーベル著・草間平作訳/岩波文庫 上・下)

(2)「国家論」を勉強するための文献について

①『共産党宣言』

(1848年刊マルクス・エンゲルス著・大内兵衛・向坂逸郎訳/岩波文庫)

②『反デューリング論』

(1878年刊エンゲルス著・栗田賢三訳/岩波文庫 上・下)

③『空想より科学へ』(1880年刊エンゲルス著・大内兵衛訳/岩波文庫)

☆②と③との関係〓略

④『家族・私有財産・国家の起源』

(1884年刊エンゲルス著・戸原四郎訳/岩波文庫)

⑤『フォイエルバッハ論』(1888年刊エンゲルス著・松村一人訳/岩波文庫)

⑥『ゴータ綱領批判』(1891年刊「1875年著」マルクス著・望月清司訳/岩波文庫)

※この著作に関連したマルクス・エンゲルスの書簡は大切です。

⑦『国家と革命』(1917年刊レーニン著・宇高基輔訳/岩波文庫)

⑧「国家について」(1919年、レーニンのスベルドロフ大学での講演録、1929年『プラウダ』に発表。『レーニン全集第29巻』及び国民文庫版『国家と革命』所収)

※

ご存知のように、マルクス・エンゲルスの「国家論」の集大成と言える『起源』以外に、『共産党宣言』『反デューリング論』『空想より科学へ』『フォイエルバッハ論』等々の著作にも、マルクス・エンゲルスの「国家論」は要約され、ちりばめられて光を放っています。『哲学の貧困』や『住宅問題』もありました。

そして、レーニンの『国家と革命』及びスベルドロフ大学での講演録である「国家について」は、マルクス・エンゲルスの「国家論」についての文献の読み方を教えて

かれています。殊に「国家について」は、「国家論」を正しく学ぶにはどうすべきかを、丁寧に示唆するとともに励ましてくれます。勉強は自分でするものです。

そこで今回は、取り敢えず、①「国家について」では、今後の勉強のためにレーニンの指摘する注意点、そして、②『共産党宣言』、③『空想より科学へ』にて「国家」について述べている箇所を紹介させて頂きます。

### ① 「国家について」(レーニンのスベルドロフ大学での講演録)

A 「国家の問題は、もつとも複雑な、むずかしい、おそらくブルジョア学者や文筆家や哲学者によつてもつとも混乱させられている問題の一つだ。だから、短い談話によつていっぺんにこの問題を完全に明らかにすることができると、決して期待してはならない。」(「国家について」 国民文庫版『国家と革命』所収、155頁)

B 「国家の問題ほど、ブルジョア科学、哲学、法学、経済学、政論の代表者たちによつて、あるいは故意に、あるいは気づかずに、混乱させられている問題は、おそらくほかにはないだろう。」(前出、157頁)

C 「国家の問題については、諸君がエンゲルスの著作『家族・私有財産・国家の起源』を読むよう、私は希望する。これは、近代社会主義の基本的著作の一つであつて、その一字一句があてずっぽうに言われたものではなく、膨大な歴史のおよび政治的材料にもとづいて書かれているという信頼をもって臨むことのできる著作である。……しかし、もういちど言うが、この著作を通読していっぺんでそれが理解できないからといって、気にしてはならない。それをいっぺんで理解した人間は、まだひとりもなかったといつてよいくらいである。……わたしがこの本をとりあげるの、さきほどのべたような意味で、問題の正しい取りあげ方を示しているからである。この本は、国家がどのように発生したかについての歴史的概説から始まっている。……この問題にかぎらず、あらゆる問題は、……それを正しくとりあげようと思えば、すべてこういう問題については、その発展全体に歴史的な回顧をあたえてこそ、はじめてしつかりと、確信をもつてとりあげることができるだろう。」(前出、159頁〜160頁)

レーニンは、この「国家について」という「短い談話」程度では「国家論」は理解できぬこと、「これほど混乱させられている問題」については、「通読していっぺんでは理解できない」であろう『家族・私有財産・国家の起源』を、何回も何回も勉強すること、こうしたことを強く要望していると思えます。勿論、労働者勤労国民に対してです。マルクスは「全幅の信頼を労働者階級の知的成長においた」のですから。

### ② 『共産党宣言』

「ブルジョア階級は近代代議制国家において、ひとり占めの政治支配を闘いとつた。近代的国家権力は、単に、全ブルジョア階級の共通の事務をつかさどる委員会にすぎない。」(岩波文庫／44頁)

### ② 『空想より科学へ』

「近代国家もまた、労働者や個々の資本家の侵害に対し、資本主義的生産方法の一般的な外的諸条件を維持するために、ブルジョア社会がつくりだした組織であるにす



ぎない。近代国家は、どんな形態をとろうとも、本質的には資本主義の機関であり、資本家の国家、観念としての全資本家である。生産力の所有をますます多くその手に収めれば収めるほど、国家は、いよいよ現実の全資本家となり、ますます国民を搾取する。労働者はいつまでもたつても賃金労働者であり、プロリタリアである。資本関係は廃棄されないで、いよいよ極端にまで推し進められる。だが、その頂点に達するや、それは転覆する。生産力の国有は、衝突の解決ではないが、それ自身の内に、この解決の形式的手段、すなわちそのハンドルがかくされている。」(岩波文庫／83頁)

「従来の社会は、階級対立のうちに動いてきたので、国家を必要とした、国家というのは、そのときどきの搾取階級の組織、その生産条件を外部からの攻撃に対して維持するための組織であった、それは特に被搾取階級を、与えられている生産方法にふさわしい抑圧の諸条件(奴隸制、農奴制、又は隷農制、賃労働制)に暴力的に抑えつけておくための組織であった、国家は社会全体の公の代表者であり、全社会を総括した一つの目にみえる団体であった。しかし、国家がそういうものであったのは、それぞれの時代に全社会を自ら代表していた階級のそれであった限りにおいてであった、たとえば、古代における奴隸所有者の国家、たとえば中世における封建貴族の国家、そして現代のブルジョアジーのそれ。しかるに国家がいつの日か社会全体の本当の代表者となるならば、そのとき、それは無用物となる。抑圧すべきいかなる社会階級も存在しなくなり、支配階級と従来を生産の無政府状態に立脚する個人の生存競争がなくなってしまうえば、そしてこれから生ずる衝突と逸脱とがなくなってしまうえば、抑圧しなくてはならぬものはないのである。特殊な抑圧権力たる国家は必要でない。国家が実際に社会全体の代表者として登場する最初の行為——社会の名において生産手段を没収すること——これこそは、同時に国家が国家として行う最後の独立行為である。」(岩波文庫／85頁〜86頁)

勉強会の発展を祈念していません、では。

(2019年6月15日 中澤 秀行)

森から中澤へ 早速の、私のための？ 論文執筆、ありがとうございます。びつくりしました。分からないことがあったら、原点・原典に戻れ、という勉強の基本について学ばされました。もったいないので、一緒に学習会やっている仲間に転送させていただきます。

(2019年6月16日 森 勉)

## 資本主義社会における「政策」とは

以下は『社会通信』No.1293(2019年8月1日号)「資本主義社会における階級対立」の続編である。

### 1、新社会党は社会主義政党である

ご承知のように、「BI」は、2017年4月開催の第22回大会で「研究課題」とされたが、取り下げられた訳ではない。また、2019年2月開催の第24回大会では「第4号、5号議案」が継続討議となり「引き続き政策研究を進め、全党的討論を行う」とされた。

しかしながら、「B I」および「中期政策第4号、5号議案」を巡って、真剣に検討し研究・議論し問題提起されている人と、何が何でも党の方針・政策として決定したい人の間で論争がある一方、多くの党員は「わからない」と、あまり深刻に捉えていない人が多いのも事実である。

私は、「B I」および「中期政策第4号、5号議案」は「政策の問題で路線問題ではない」という主張には驚きを禁じ得ない。

また、資本主義社会である現在「労働力の脱商品化」「賃労働の廃絶にむけた第一歩だ」には驚かされた。資本主義を全く理解していない。階級対立、労資の非和解的階級関係の存在そのものを無視している。ことは政策の問題にとどまらず、社会主義理論を含めた問題でもある。

私たちの師である向坂逸郎は『政策とはなにか』（『社会主義』1968年12月号掲載）というテーマで論文を発表している。1「社会改良と社会革命」 2「階級闘争の党」、3「統一戦線」の見出しを付けた3部構成の論文である。

ここで、2「階級闘争の党」から一部を紹介したい。

「社会主義政党的目標は、いうまでもなく、社会主義の実現でなければならない。社会主義の実現を目指さない社会主義政党的は、言葉の矛盾である。資本主義のなかに改良を積み上げることによって、社会主義となる、という思想の中には、資本主義は社会主義である、という意味が含まれている。資本主義をいくら積み上げても資本主義である。資本主義が社会主義となるには、社会的基本的条件を変えなければならぬ。社会的基本的条件を、私有制から共有性に変えることなくして、社会主義は実現されない。革命とは、この基本的条件を変えることである。この基本的条件を革新する『物質的な力』を結集することを基本的任務としない社会主義政党的はない。

資本主義の矛盾は、ことごとくこの基本的矛盾に発する。労働者階級に直接の搾取を強い、勤労者一般の社会大衆に犠牲を押しつけない独占資本はない。したがって、社会主義政党的は、これらの人々に、独占資本の搾取と収奪の機構を説明するだけでなく、この搾取と収奪は、いかにして排除できるかを説明するだけでなく、これらの機構を排除する力、社会的な力をつくり上げる中心的な『物質的な力』でなければならぬ」と述べている。

## 2、資本の貨殖（搾取）をしぼる力が弱くなった

「B I」および「第4号、5号議案」が提案された理由・背景として、独占資本とその政治勢力が戦後一貫として進めてきた「生産性向上運動」と巧妙かつ大胆な方策で階級的労働組合幹部の取り込みや労働者の思想改造教育によって大きな力を持ち、他方、労働者階級の反撃する力と態勢が不充分であったことによって、労働運動の弱体化、社会主義勢力が衰退した。

その結果、労働者階級を取り巻く労働・生活環境が著しく様変わりし、労働法制的改悪、貧困層の増大、非正規労働者の増大、社会保障の劣化、社会保険制度への不安、長時間労働、過労死などが様々な問題が絡み合って労働者階級の窮乏化が一層激しく襲ってきている。

従って、私が繰り返し主張しているように今日の労働者を取り巻く実態に対してそ

の原因を突き止め、そこに対して根本的治療が求められているのだ。社会主義政党的最大の闘争課題は労働者階級の階級的意識とそれによって組織された階級的労働組合の強化である。「階級的労働運動の再建」「社会主義政党的強化」を全党で再確認し、研究する「プロジェクト」の創設を訴えているのである。

### 3、階級社会であることを忘れまい

争点となっている「憲法解釈」や「普遍主義」をめぐる問題も、社会主義者、社会主義政党的として、資本主義社会における労資の階級対立、労資の非和解的階級関係を全ての土台に据えて考えなければならぬ。マルクス主義の立場から離れ、ブルジョア思想、ブルジョア民主主義に押し流され階級対立と無関係で論じられる誤りを犯してはならない。

労働者が生み出した価値を奪い、搾取を強め巨額の収入(富)を得ている資本家と、その資本家の下で「命令と服従」で抑え込まれ、賃金奴隷として働く階級とを「一人ひとり」は給付における権利において平等」などと暢気に同列に扱うことは社会主義政党的として最悪の事態である。

まずは地方自治体議員を増やし、国政に議員を獲得すること、結党時の党勢を回復すること、を目標に全党の知恵と力を結集することである。

(2019年8月18日 山下 俊幸)

## オリンピックと輸送網

久しぶりに「北の大地」を旅した。空から道央の旭川、宗谷線で名寄、音威子府への旅である。日本全国、来年のオリンピックめざし建設ラッシュが続く。人口減少、内需縮小はとまらない。外国からの旅行者で儲けたい。オリンピック後は「野となれ山となれだ」「儲けられる時に儲けるのみ」資本の本性である。

東京の駅舎はJR中心に改修・改装工事で迷路、そして大混雑である。新宿駅は「縄張り」である。だが乗車ホームへの移動は悪戦苦闘させられる。列車名は松本方面への信濃、乗車ホームは9番、10番。ふだんは南口を使う、この日は西口から駅舎に入った。が改修工事で9、10番線に行く通路がわからない。どこかに案内があるはずだ、アッチへ行け、そしてコッチとの表示はある。ホームにたどりつけぬ。迷った時は始めにもどるの教訓を思い起こし、指差し確認。はじめにもどってもう一度で、「ココなんだ」。発車時刻はせまり心はあせる。クタバレ、ヤル気は失せてしまう。

羽田もそうだ。いつものようにモノレールを降り、北の搭乗口をめざす。なんだか全体が様変わり、全体像がつかめない。いつもどおりに北海道方面の搭乗口に向かう、しかし違う。矢印の案内はある。しかしどう行けばいいのかわからない。鉄道の駅舎と同じである。案内所の女性に問えば、「ソコですよ」と指をす。ソッチの方へ、しかしわからぬ。ウロウロし、陰の所に上りのエスカレーターが、多少旅なれた者でもこういう具合だ。オリンピックは日常生活にとんでもない影響を与えている。

ウロウロしながら搭乗口に着いた。搭乗検査のこれまでより厳しそう。夏休み、旭川への最終便だが、家族連れの人ひとひと。満席である、離陸は遅れ、到着時間も宿へはバス。客は少ない。定時になっても発車しない。運転手さんに「いつ出るの」、

運転手さん「荷物受け取りが混雑。ぼくも早く出したいが、まだ、二〇三〇分かかりそう」。こうして旅が始まった。

「北の大地」は線路廃止めぐり揺れている。旭川―稚内の基幹線路の宗谷線も例外でない。特急、快速が半分に減らされた。鉄道利用の旅は不可能なほどである。旭川の駅舎は10年ほど前に建て替えられた。軍艦を思い起こす巨大な駅舎となった。旅人はまばらである。巨大な駅舎の「主人はおれ」というようにイオンが占拠する。列車は二両編成、旅行者とおぼしきはぼくと鉄キチらしき若者のみ、若者はカメラと写真機器を納めた大きな荷物をもち、車内・車外の所かまわず、シャツターを切り続ける。彼を観察しているうちに名寄についた。

帰りは音威子府から旭川まで久しぶりの特急列車。座席シートに「ICカード利用可能エリア」を表示するパンフレット、利用可能な線区はわずか三つ①函館本線小樽―苫小牧、学園都市線桑園―北海道医療大学、③函館本線白石―岩見沢とある。ICカードが使えない、カードを使える改札口をつくらないとは？ JR北海道は三つの線区を除き廃止したのである。

## ◇読者からのおたより◇

**憲法改悪にノーと審判** 昨日職場新入社員より、先輩からパワハラされたと泣いて電話があった。参議院選挙で、憲法改悪にノーと審判が下された。選挙結果の技術的な判断はあるものの、過去の戦争の反省と、平和に対する国民一人ひとりの思い、さらに安倍政治に対する怒りの表れである。一方それらを組織する目標を持つ新社会党の大会で、BIなるものが議論となり研究課題となりたなあげされた。10万円程度の現金で、憲法で保障された権利を全て放棄する、という。国会議員もなく、政党要件もない党がなにをかいわんやである。

今また、『普遍主義』とかで、いろんな社会保障を没階級的に資本家や高所得者にも与えるかいたかの議論が潜行している。片や、今職場の中でどんなことが起きているか考えているだろうか。低賃金、仕事の強化、サービス残業、年金生活者は収入も低く、今後も下がる一方である。特に国民年金はいくらかご存知だろうか。6万5000円だ。こんな金額では生活はできない。

東京アース銀行は、これに手をさしのべている。『老後お金を貸します。ご返却はお亡くなりになった後で、ご自宅不動産の売買で精算いたします。』と。

今象徴的に、全日本建設運輸連帯労働組合、近畿地方本部関西地区生コン支部(関ナマ労組)が、政権、警察より、不当な弾圧をうけている。逮捕理由はでたらめだ。正社員にせよと『不当な要求』をしたとか、現場のコンプライアンス活動を『恐喝未遂』とかの罪で逮捕している。

私も毎週土曜日の抗議に行っている。色々な団体の方も参加されている。憲法28条団結権の侵害で労働運動への介入で、不当労働行為で憲法違反、法律違反だ。

いい古されているが、新社会党が社会主義政党とするなら、市民運動や、労働運動等の大衆運動にも積極的に関わっていくことだ。働く労働者の実態と気持ちを知り、力になることだ。それから生まれる信頼、社会主義政党の命だ。

(滋賀県近江八幡市 沢井清)

## 『国労東京』記事に驚き

『社会通信』8月15日号の7頁の「国労東京」2019年4月5日、

No.1829の記事には驚き。「組合は会社とケンカする組織ではありません。…生産性で協力。

分配で対立」です」と。1970年の反マル生闘争の教訓は？ 国鉄闘争で国労差別・選別、

首切りの教訓は？ 戦後日本労働運動の牽引車であり、幾多の大闘争を闘ってきた国労はどうなっているのでしょうか。

(元国鉄闘争支援者)